



TITLE:

金數量説の發展に就いて

AUTHOR(S):

松岡, 孝兒

CITATION:

松岡, 孝兒. 金數量説の發展に就いて. 經濟論叢 1932, 35(1): 88-104

ISSUE DATE:

1932-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130199>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 一 第

卷五十三第

行發日一月七年七和昭

論 叢

經濟統制の理論的根據

經濟學博士 作田 莊一

租税と公益

法學博士 神戶 正雄

政治算術附地方算法に就きて

法學博士 財部 靜治

時 論

恐慌打開策としての『購買力補給案』

經濟學士 谷口 吉彦

研 究

統計比率に就いて

經濟學士 蜷川 虎三

金數量説の發展に就いて

經濟學士 松岡 孝兒

幕末の財政紊亂について

經濟學士 大山 敷太郎

說 苑

貨幣の主觀價值について

經濟學士 柴田 敬

金融機關としての預金銀行の地位

經濟學士 中谷 實

スミスの歴史學的教養と環境

經濟學士 竹中 靖一

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

金數量説の發展に就いて

松 岡 孝 兒

一、序 言

私がここに試みんとする小論は、謂はゆる金數量説なるものの發展をば、金の死藏との關係に於いて取扱はんとするものである。私の考ふるところによれば、謂はゆる金數量説なるものは、其主張に於いて必然的に含まれてゐる内的矛盾により、自らその發展を遂げるものであり、死金藏はその發展の段階に於いて、自ら金數量説を規定する一の要素としてあらはれ來るものである。私はさきに金數量説をば、特に金と物價との關係に於いて取扱つたが、¹⁾ここでは他の視角から、即ち金分配に於ける自動的均衡學説を構成する理論としての金數量説をば、金の死藏問題との關係に於いて發展的に考察せんとするものである。

此の意味に於いて私の謂はんとするところは、金數量説が謂はゆる素朴的形態より出發して三つの段階を以て發展せるものであること、そして今日は其の最後の第三段階に於いて、金死藏問題が金偏在問題と不可分的關係を以て、ここに謂はゆる新なる金數量説中に含まれるに至つたものであるといふことこれである。

1) 拙稿：金數量説に就いて(經濟論叢第33卷 PP. 557-569, PP. 741-752.)

かかる前提に於いて、然らば金數量説は如何なる發展を示したのであるか？其の第一段階に於ける展開は如何？更に發展せる第二段階に於けるそれは如何？そして其の最後の第三段階に於ける現狀は如何？私は以下順次此等三段階に於ける金數量説の展開に關する説明に移るであらう。

二、發展の第一段階に於ける金數量説²⁾

私が以下屢々使用せんとする金數量説なるものの意義については、已に他の機會に於いて述べたところである。今行論の便宜上更に繰返して述べると、大體金數量説とは「金と物價との關係をば因果關係的に見、金の側にその支配的重點を置かんとするものである³⁾」といふに歸着する。尤もここに問題とする金は單なる金在高を示すものではない。それは貨幣金としての在高を示すものである。前者を主張する論者もないではないが、今これには組し得ない。これ亦已に私の述べたところである⁴⁾。

今、古典的經濟學の金理論に於ける金數量説の地位を考察するときは、その存在は決して單獨的孤立的なものではない。それは常に謂はゆる金の分配に關する均衡理論と結合して金の自動的均衡理論なる一の基礎理論を構成するものである⁵⁾。そして私見によれば、然る限り、金數量説は自ら其の中に含まれる矛盾（その矛盾の何たるかについては後に説明する）をば、常に金分配の均衡理論を通じて解決することにより、限りなくその發展を追及するものであると考へることができ。

- 2) 實際に於いては金と共に銀が考慮されてゐたことは勿論である、姑く之を金數量説を以て示す。
- 3) 拙稿：金數量説に就いて（經濟論叢第33卷第4號 p. 81.）
- 4) 拙稿：上掲，pp. 86-91.
- 5) 小畑茂雄譯：地金の高き價格，銀行券の減價の證據（リカアドオ貨幣銀行論集 pp. 33-129.）；Aftalion, Albert : L'or et sa distribution mondiale, p. 32, pp. 5-12.

是に於いて問題は自ら、かくの如き基礎的立場よりして古典的素朴的なる意味に於ける金數量説の内容は如何？といふことに歸する。私は私の考察を遂げんとするに當り、私の立場よりしてこの素朴的金數量説を以て重要なりとし、尙又そこには金死藏の永續なる事實なきことを以てこの試論の出發點とする意味に於いて、先づ最初にその内容を述べんとするものである。

古典的經濟學に於ける金の自動的均衡理論は、その本質なる構成要素として金の物價に及ぼす作用及びこれに伴ふ金の移動に關する理論を有つ。この中金の物價に及ぼす作用に關する理論が私の謂はゆる金數量説であり、金の移動に關する理論が私の謂はゆる金の均衡理論である。

素朴的なる意義に於ける數量説に於いては、貨幣はすべて金によつて示される。従つて金數量説による限り、貨幣價值はその金分量に反比例することを示し、物價は金分量の増減に應じて騰落する。然るに金は國內貨幣であると共に國際貨幣である。この點よりして金數量説は、自ら分れて國內金數量説と國際金數量説との二つとなる。従つて古典的經濟學に於ける金理論は、この二つの金數量説が所謂金分配に於ける均衡理論と結合してそこに成立するものであつて、即ちこれによつて各國に於ける金は、たえず金の均衡理論を通じて世界の金と平均するの傾向にあるものであり、従つて各國に於ける物價と世界に於ける物價とは互に相近づかんとし、絶えず新なる均衡が求められんとしてゐるものである。

私は更に古典的金理論に於ける以上述べた三要素の意味及び其の相互關係について説明を續け

6) 此の意味に於ける死藏は従つて貨幣金としての死藏の意味である、以下同然。
7) Cantillon : Essai sur la nature du commerce, Ch. VI, VII, VIII. De l'augmentation et de la diminution de la quantité d'argent effectif dans un Etat; Montesquieu : L'esprit des lois, 1748; Hume, D.: Essays and Treatises, 1752, Letter to J. Oswald; Ricardo, D.: High Price of Bullion, 1811; aill, J. S.: Principle of Political Economy, 1847 等に於ける考はそれである。

やう。

(一) 國內金數量説⁸⁾——この主張によれば各國に於ける金在高は、各國に於ける物價を決定するものであるとし、其の間に於ける金分量の増減は、當該國に於ける物價の騰落を決定し支配するとなすものである。

(二) 國際金數量説⁹⁾——金と物價との關係に於いて、金が物價を決定し支配するといふ理論は、單に國內的理論としてのみならず、更に國際的理論としても亦其の成立が認められる。かくして世界に於ける金生産の増加、従つては金分量の増加は、世界物價の騰貴を決定し支配するものである。素朴的形態に於いては、嚴密なる意味に於ける世界物價は、なほ成立してゐない。それは唯實際に於ける物價、世界に於ける物價の意味に解したい。尤も概念的には、世界物價なる規定は之を用ひられ得るかも知れない。また近似的なものとしても考へられ得るものがあるかもしれない。しかし今此等の問題には立ち回らない。

(三) 金の均衡理論¹⁰⁾——今、上述せる金の國內數量説及び國際數量説に於いて示される作用の結果は、常に必ずしも同一の結果を生ぜしめるものではない。このことは即ち金數量説を通じて見る限り、國內物價と國際物價とは常に必ずしも同一に非ざることを示すものである。是に於いて殘されたる問題は自ら明かである。即ちかくの如き國內物價と國際物價との間に於いて昂揚される對立矛盾は、如何なる理論によつてまた如何なる過程によつて止揚されるものであるかといふこ

8-9) Pose, Alfred: De la théorie monétaire à la théorie économique, 1930, pp. 11-12; Aftalion, A.: L'or et sa distribution mondiale, 1932, p. 11.
10) Surin, Philippe: La distribution internationale de l'or, 1927, p. 9.; Aftalion, A.: L'or et sa distribution mondiale, 1932, pp. 11-15; Pose, A.: op. cit. p. 12.

とである。

更にたち入つて金の自動的均衡理論の内容に關して述べやう。

素より金數量説による場合、世界に於ける金在高が、常に同一狀態に置かれてゐるとする限りに於いては、物價は専ら國內に於ける金數量説によつて支配され、従つてそれは國內金在高の大小に應じて決定するものであると考へることができる。然るに事實上各國に於ける金在高は、不平等である。このことは、その必然的結果として世界各國に於ける物價をして同一ならしめ得ない。かくて國內數量説を通じて見たる各國の物價水準には、自ら不平等不均衡の存在することは否定し得ない。

尙ほ翻つて國際間の物價は、國際數量説を通じて見る限り、世界金在高に依存するから、互に同一水準に歸着する傾向を有つ。勿論これによつて意味するところは、あらゆる國に於ける物價水準が嚴密なる齊一性を示すものであるといふのではない。ただ各國間に於ける經濟上の特種事情を考慮外におく限り、自らその物價水準が一定の均衡に於いて成立せんとするの傾向にあるといふことを謂はんとするに止る。

かくして各國に於ける物價水準は、常にその國內金在高によつて決定されると共に、同時に世界に於ける金生産高従つてはまた世界に於ける金在高の變動に依存する。

ここに於いて問題は國內數量説を通じて各國物價に認められた特殊性と、國際數量説を通じて

世界物價に認められた齊一性との調和は、如何なる理論によるかといふ點に歸する。

がこの説明は明瞭である。前述金の自動的均衡理論の第三構成要素たる金の世界的分配に於ける均衡理論が即ちそれである。正にこの均衡理論こそは、金によつて此等國內數量說と國際數量說とを結合し、以て此等兩者の間に存する矛盾を解決せんとするものである。

惟ふに數量說¹¹⁾による限り、各國に於ける物價は金の増加によつて騰貴し、そはその他の事情にして相等しき限り、必然的に商品の輸入を増加する。更に商品輸入の増加は、従つて之に對する金の流出を惹起し、かくてその金の流出は、更にその金流出國に於ける物價の下落と、金流入國に於ける物價の騰貴とを惹起せしめる。寔に世界に於ける金分配に起る均衡こそは、あらゆる國々に於ける物價をば同一均衡に歸せしめんとするものである。かくして金數量說にたつ限り、金の均衡理論は、よくその國內的見地に立つものと國際的見地に立つものとの間に於ける矛盾を解決し、これによつて物價水準をは、金の國內的在高と共に國際的在高を通じて常に一定の均衡に向はしめんとするの傾向を示し、各國に於ける金在高と世界に於ける金在高とをして相伴つて物價を支配し決定せしめんとするの傾向あることを示すものである。

従つてもし、世界に於ける金分配にして其の間に不平等不均衡が起るに於いては、國內數量說による物價水準と國際數量說による物價水準との間には、自ら不一致が起らざるを得ざるものであり、この不一致こそはやがて金分配の均衡理論を通じて世界に於ける金分配の不平等不均衡を

11) 小畑茂雄譯：地金の高き價格、銀行券の減價の證據（リカアドオ貨幣銀行論集、pp.33-36.）；Aftalion, A.: L'or et sa distribution mondiale, pp. 6-7; Pose, A.: op. cit. pp. 20-21. pp. 60-65.

除き、國內金在高をば國際金在高との均衡關係に於いて解決せんとするものである。この意味からして世界に於ける金分配の不均衡は、金の分配均衡理論によつて國內數量説と國際數量説とを結合調和せしめ、以てその矛盾を調和し決して金の長期的偏在を起さしめない。

金による國內數量説と國際數量説とは、かくして何れも世界に於ける金分配の均衡理論の媒介を通することにより、其の自動的均衡學説に於ける存在が把握される。或はまたむしろこれら二金數量説と金分配の均衡理論とは相結合して一體となり、これによつて古典經濟學に於ける金の自動的均衡理論の本質を構成するものと斷することができ¹²⁾る。

併し凡そ以上述べ來つたかくの如き理論は、漸く複雑となり來つた其後の經濟に於いても、常に我々が現實に於いて經驗する事實と一致せるものであるか？事實の示すところは必ずしもこれを肯定し得ない¹³⁾。これ即ち私が金數量説に於ける發展的傾向をば、事實に基いて追及せざるを得ない所以である。

三、發展の第二段階に於ける金數量説

既に述べたるが如き素朴的な意味に於ける金の機能並に移動に關する三要素は、その後經驗された多くの現實問題によつて、漸く理論と實際との間の矛盾を認めざるを得なかつた。特に硬貨の外に信用の異常増加による預金通貨を加へた廣義の貨幣又は此等の貨幣の流通速度なるもの

12) Pose, A.: op. cit. p. 22.; Aftalion, A.: L'or et sa distribution mondiale, pp. 10-15.

13) Aftalion, A.: L'or et sa distribution mondiale, pp. 32-34; Fisher, A.: Le pouvoir d'achat de la monnaie, 1926, pp. 321-339.

への關心は、所謂貨幣數量說論者と謂はれる多くの人々によつて批判され修正され¹⁴⁾、かくて金數量說の發展的第二段階に於ける三要素は、既に論じたる素朴的な形態に於ける三要素をば、必ずしもそのままには認め得ざるに至つた。

その批判の、從つてはまた修正の重點は、謂はゆる三要素中の第一要素即ち國內數量說に關するものである¹⁵⁾。蓋しこの第二段階に於いて批判された國內數量說なるものは、もはや從前の如く單純に國內に於ける金數量が、その國の物價を決定するといふが如きものではない。蓋し各國に於ける物價水準は、國內金在高に於いては著るしい相違を示すに至つてゐるにも拘らず、かなりな齊一的變動を示してゐるからである。此の意味に於いて、國內物價は、もはやその國に於ける單純なる金在高のみに依存するものではなくて、硬貨及び預金貨幣を含む謂はゆる通貨總量に依存するものであり、更にはまたそれらの硬貨または預金貨幣の流通速度に依存するものである。即ちバーカー¹⁶⁾又はフィッシャー¹⁷⁾の數量說方程式に於ける MV 又は $MV + M'V'$ に依存するとする考である。ルヴァースールの $(M + R)(V + V')$ も同様の意味を有つ。

發展の第二段階に於ける三要素中、第一要素に對するかくの如き修正にも拘らず、第二要素即ち國際數量說に至つては、依然として金に依存すると考へられてゐる。從つて三要素中國內數量說は、もはやその素朴的な性質を失つてゐるが、第二の國際數量說は從來の内容に於いて其の存在が認められ適用される。

14) Nogaro, B.; Le rôle de la monnaie dans le commerce international et la théorie internationale; Hartley Withers: Meaning of Money. 其他 Newcomb, Walker, Kemmerer, Pigou, Keynes 等に Fisher は著名である。

15) Fisher A.: op. cit. pp. 59-60; Aftalion, A.: L'or et sa distribution mondiale, p. 154 et s.

16) Barker, D. A.: The Theory of Money, 1913, p. 51 (M は貨幣量 V は流通速度)

ここに於いて残された問題は第三要素即ち金の世界的分配に於ける均衡理論が、此等二要素との關係に於いて演ずる役割である。換言すればこの場合流通貨幣總量によつて支配される國內數量説と金によつて支配される國際數量説との間に於いて、流通均衡理論は如何に作用するか？各國の流通貨幣總量と世界に於ける金分量との間の關係は、如何にして之を見出し得るか？といふことである。

惟ふに數量説による限り、國內物價は貨幣流通總量に依存するものと考へるのである。¹⁹⁾併し此の場合と雖も、國內的流通貨幣總量も亦、國際金數量説との關係に於いて金を共通物としてもつ限りに於いては、物價があらゆる國に於いて同一水準に歸着せんとするの傾向が、金生産の、從つては金在高の増減に應じて、亦大體第一段階のそれと殆んど類似の増減をなすものとして存することが考へられる、よしんば程度の差はあるにしても。

私の見るところでは、凡そ數量説の認められる限り、一國に於ける金の流入は、その一般狀態に於いては自ら預金貨幣の創造發行を可能ならしめ、從つてそはまた自ら貨幣流通總量の増加を決定し支配するものであると考へざるを得ない。またかかる事實ありしことが謂はゆる國內金數量説への修正を齎したものでなからうか？²⁰⁾

尙又此場合と雖も、新に生産された金の分配が不均衡なるとき、特にその事情が比較的持續するとき、一定期間後に於いて著しく金の分配が或る國に過剰であり、他の國に缺乏せる狀態を

17) Fisher, I.: op. cit. pp. 26-30 (M は貨幣量 M' は信用量 V, V' は夫々の流通速度)

18) Levasseur: La Question de l'or, p. 158 (M は貴金屬量, R は發行準備額, C は流通速度, Cr は信用)

19) Fisher, A.: op. cit. pp. 15-16.

20) Aftalion, A.: L'or et sa distribution mondiale, p. 157. ;——: Monnaie, prix et change, 1927, pp. 113-115.

生ぜざるを得ない。然るにまた事實かくの如くして起る世界に於ける金の偏在は、よしあるにしても一時的であつて永續しない。我々はそこに依然として金の分配に關する均衡理論の存在することを認めざるを得ない。

蓋し通貨が金の準備によつて——其の準備との割合には相違はあるが——發行されるとすれば、金の増加は第二段階の場合と雖も一般的には自ら通貨の増加を伴ひ、數量說による限り、それは物價の騰貴を惹起する。特に通貨の流通速度の増加する時に於いてはその傾向は尙更大である。唯若し單に通貨の増加が外國に於いて起る物價騰貴なる心理的作用に依るとするときは、その限りに於いて問題は數量說を去る。然し數量說によるかぎり、物價は貨幣量に依存するものであることと明かであり、更に貨幣量に至つては金と一定關係にあることが考へられる。

従つて金準備による通貨の増加、特に通貨の流通速度の増加がおこるが如きときに於いては、自らそこに物價の騰貴は生ぜざるを得ざるに至るものであり、ここに於いて一度物價騰貴にして起る限り、低物價國よりの商品の流入を來し、ひいては勘定差額の不利、金の流出を來し、かくの如く一度通貨増加の基準たる金の流出おこれば、そこには自らこれに伴ふ通貨の減少、従つては物價の低落が伴ふものである。

かくしてこの問題を實質的に解決するものはまた實に金の世界的分配に於ける均衡理論である。この意味に於いて第二段階に於ける金の自動的均衡理論は、その國內數量說に關して、一應は金

以外の他の要素へ著しくその注目をむけてゐるが、實はその貨幣に關する國內數量説と國際數量説との矛盾の解決には、金分配に於ける均衡理論を無視し得ない。そしてまた此の理論の認められる限り、依然として金分配には著しき金死藏從つては金偏在の永續は考へられない。

四、發展の第三段階に於ける金數量説²¹⁾

然るに世界大戰後、金理論に關する觀念は更に發展してその第三段階に到達するに至つた。かくして此の段階に於いて、金の作用並に移動に關する古典的三要素は、多少の留保を加へられながら、最初の素朴的形態に於けるが如く、専ら金を中心とする考に復歸するに至つた。

世界大戰に際し世界に於ける金分配の不均衡は、その米國その他の中立國に於ける金集中によつて特に顯著となつた。²²⁾併しこの事情は金の自動的均衡理論に反對するものとして現はれたものではない。それは戦争に基いて起つた米國其他中立國の輸出増加なる特殊事情による一方的移動によるものである。従つてこのことは其の後に於いて、その反動として起るべく豫想された事情によつて、當然その金流出國への歸還が考へられたものである。

かくの如き關係に於いて起れる事情は、米國及びその他中立國に於ける物價騰貴である。²³⁾このことは紙幣管理制度に於いて金の魅力を忘れたる人々に對して、再び金に關する國內數量説への回想的注目を示したものである。しかもこのことはまた單なる素朴的な金數量説ではない。そ

21) Pose, A.: op. cit. p. 59.; Aftalion, A.: L'or et sa distribution mondiale, 1932. p. 158 et s.

22) Pendéle, C. A.: La répartition de l'or dans le monde, 1928, p. 76, p. 105, p. 108, p. 112, p. 118, p. 124, p. 131.

23) Société des Nations: Annuaire statistique internationale, 1931, pp. 270-273.

は一方に於いて強く國內金在高が國內物價を支配し決定するものであるといふ考への復歸を意味すると共に、更に發展の第二段階に於ける物價の決定者が廣義に於ける通貨なることをも忘れることなき金數量説である。²⁴⁾

かくして戦後金偏在の傾向は漸く著しくなつたが、一九二一年以後の米國に於ける金蓄積は、最早物價の騰貴を伴はなかつた。²⁵⁾併し國內金在高と國內物價との間に於ける密接な關係を再認識したる後に於いては、もはやかくの如き事情の發生にも拘らず依然として金の國內數量説を放棄するを得ず、従つてはまた國內金在高と國內物價との間に於ける金の増加は、自ら物價の騰貴を惹き起すものであるといふ考へを否定し得なかつた。

かくて一方に於ける金の増加があるにも拘らず、しかも尙物價の騰貴なしとせば、そは更に何等かの特定條件が發生したものであることを認めざるを得ざるものであり、ここに金死藏の理論が、新なる戦後の金理論中に論ぜられるに至つたのである。このことは金が國內的に過剰であるにも拘らず、中央銀行政策によつて金の死藏の行はるる限り、物價騰貴を惹き起し得ないものであるといふことを意味するものであり、従つて現象的には國內金數量説を否定しながら、實質的には之を肯定するの傾向を示すものである。²⁶⁾

かくして金死藏の新理論は、金による國內數量説を再認識しその現象形態に於ける矛盾を解決して、より實質的に國內數量説への認識を深めるに至つたものである。

24) 此意味に於いて戦後中央銀行制度の戦前に於ける保證準備直接及間接制限法最高額制限法等を清算して比例準備法に向ひつゝある事の重要さがある。
25) Société des Nations: Annuaire statistique internationale, 1931, p. 270.
26) このことは金數量説の難點を主として信用又は流通速度に於いて解決せんとする第二段階に對して重要な點である。

この金死藏問題は最近に於いて更に一步を進め、金死藏理論の發展は金の國際數量説即ち三要素中の第二要素にも關係するに至つてゐる。

この第二要素たる國際金數量説によると、世界の物價は世界の金在高がこれを支配し決定するものであるとするのであるが、之に對する金死藏の立場は第二要素たる金の國際數量説への否定を示すものではなくて、これによつて古典的關係を再認識するに役立つ新觀念を定立せしめるに至つたものである。

先づ最初に於ける主張は、金在高の増加なる事實は物價水準の維持を保證するものではないといふことである。世界に於ける取引の増加は物價水準を維持する上に於いて年平均三・一%の貨幣金の増加を要求してゐる。²⁷⁾ 最近に於ける金在高は、勿論この意味に於ける三・一%を認めることに關して大體一致してゐたのであるが、不幸にして米佛に於ける金蓄積は、相對的に他の諸國に於ける金在高の減少を生じ、ここに最低三・一%の割合に於いて示される米佛以外の世界各國に於ける金不足がおこり、そは一九二六年——一九二八年に於いて低度の、一九二九年——一九三〇年に於いては特に顯著なる不足として示されるに至つた。かくしてこの金偏在によつて世界の物價下落は先づ一九二六年——一九二八年に於いて低度に、更に一九二九年——一九三〇年に於いて高度に發生するに至つたと謂ふこと即ちこれである。²⁸⁾

かくの如き意味に於いて物價の世界的下落は、金の生産に關する問題よりも、金の偏在によつ

27) Kitchin: The Supply of Gold compared with the Prices of Commodities (League of Nations: First Interim Report, pp. 83-84).

28) Aftalion, A.: L'or et sa distribution mondiale, pp. 161-162.

て促進されたといはれる。具體的に謂へば此の間米佛二國は、世界に於ける貨幣金の五分の三を占めたのであり、このことは、其他の諸國に於ける金の相對的缺乏を著しからしめ、惹いてまたそは物價の大下落をも將來せるものであると謂ふのである。

次にかくの如き場合でも、若し國際金數量説がその素朴的形態に於いて認められるとすれば、米佛に於ける金の過剰は、必然的に他の諸國に於ける金の缺乏と比較されてここにその相互的相殺が行はれる筈である。金の米佛に於ける過剰、その他の國に於ける缺乏この二つの事情は、その素朴的金理論の成立する限り、所謂商品價格の相對的比較を通じて自ら中和均衡するの事情を生ずべき筈である。然るに事實は然らず。起れるものは世界に於ける物價の一般的下落であつて、その騰落を通じたる均衡ではない。そして此の間に於ける事情を説明するものとしては、國際金數量説に於ける金の死藏問題が現はれる。金の過剰國に於ける中央銀行は、夫々その金在高に對して信用の膨脹をば極力避ける。今米佛に於ける金準備の割合を見るときは、米國は四〇%乃至三五%まで低下せしめ得るに於いて、その實際在高の割合は七〇%又はそれ以上であつたのであり、最近に於いては八四%を越えてゐる。²⁹⁾ この事情はフランス銀行に就いても亦同様である。その法定最低準備額三五%に對して、事實上の準備高は五六%を越えてゐる。³⁰⁾

これを要するに、金の國際數量説に於ける金死藏の出現は、この世界に於ける金生産を以てその物價變動の支配的決定的要素となす理論の上に一の前提を加へたものである。即ちそは金生産

29) 此問の事情を説明せしめるものは Pendèle : op. cit. pp. 46-78.
30) Aftalion, A. : L'or et sa distribution mondiale, p. 163.

が十分に行はれても、これによつて物價を維持することは必ずしも豫期し得ないといふことであり、なほそこにはその金の適當なる分配を必要とすることを前提とするものである。

凡そ金はその單なる存在の仕方をして物價に作用するものではなく、その作用は支拂手段の分量により、その支拂手段の分量は金によつて支配され決定されるものである。若しかくの如き支拂手段の創造が行はれない限り、即ち金の死藏が行はれる限り、金の生産が作用し得る影響は否定され、物價は下落する。かくの如き考こそはまた強くこの段階に於ける金の均衡理論を支配する考である。

五、要 言

以上金の數量説に關する觀念に於いては、先づ其の自動的、均衡理論をなす三要素中、第一要素と第二要素とに含まれてゐる矛盾は、其の第三要素を通じて限りなく發展するものである。かくてかかる發展の間にその第二段階に於いて、第一要素に對する修正が現はれ、更に第三段階に於いては第一要素に於ける金への復歸と共に金死藏の問題を生ぜしめ、そはまた更に第二並に第三要素にも現はるるに及び、ここに金の古典的、自動的、均衡理論は再組織されるに至り、かくて金の古典的自動的均衡理論を構成する三要素——國內金數量説、國際金數量説、金均衡理論——は、金死藏を含んだ新なる立場に於いて全一體として結合され組織されるに至つてゐる。

金の國內數量説がその第二段階に於いて考へるところは、よしんば貨幣總量が國內金在高の増加に應じて増加するとしても、物價は金よりも寧ろ貨幣總量に於いて支配されると考へられる。

從つて金の素朴的國內數量說並に廣義に於ける國內通貨總量說は、共に其の結果から謂へば同一の結果に到達するものである、唯だからと云つてこれら二つの數量說が互に必然的に代位しあふものではない。兩者は夫々その存在の理由を有つ。

更にその發展せる第三段階に於いては、物價はもはや金の蓄積國に於いて、必ずしも騰貴しない。併しこれによつて必ずしも國內數量說は否定されもしない。これを條件づけるものは即ち金の死藏である。

更に金の國際的數量說に關しても、金の偏在問題が、從つてはまた金の死藏問題が論ぜられる。蓋し金偏在量又は金死藏量は恰も金鑛脈の底深く眠る處女金として、それがあたかもそれ自體探掘されざりしが如く見做されるからである。

最後に金の世界的分配に於ける均衡理論は如何？その實際はこれまた金の死藏によつてその形を歪めてゐる。蓋しかくの如き死藏にして行はれざる限り、國內及び國際金數量說間に於ける金の均衡を恢復すべき自動的機構は、自らその正常的軌道によつて動くからである。即ち金の過剰國に於ける物價の騰貴は商品取引上の輸入を、更には金の過剰分を流出せしめる勘定差額の増加を將來するものであるからである。然るに金の死藏はこの作用を制限する。

結局以上述べたところに於いて明かなるが如く、我々が現在有つ金理論に關する三要素の夫々の内容は、その古典的金理論に於ける三要素と同一ではない。此等三要素はその自らなる矛盾の發展に於ける夫々の段階に於ける特殊事情、特に最後の段階に於いては金死藏によつて將來され

た人爲的障礙により、夫々その程度に於いて修正される。蓋し金死藏にして一國內に行はれなければ物價は金過剩國に於いて騰貴し、これによつて金の國內數量説は何等の修正なくして其の妥當性を示すであらうからである。更にまた金死藏にして國際間に行はれなければ、世界の物價は下落しなかつたであらうし、尙又金死藏にして行はれなければ、金の過剩によつて惹き起された物價騰貴は必然的に金移動を伴ひ、之によつて金の世界的分配上に均衡を生ぜしめ、かくして國內物價と世界物價とは相近づかんとする傾向を示すからである。

然るに今や、世界金在高は各國の事情に應じて古典的理論の示すが如くには分配されず、過大なる金所有國に於いて金が死藏されてゐる。そは恰もその死藏に應ずるだけ世界に於ける貨幣金分量の不足を示すものであり、然る限り其の影響を無視し得ない。

かくして世界に於ける金分配に關する自動的均衡理論は、その發展の第一段階に於いては常に素朴的形態に於ける三要素の自動的機構に於いて作用し、謂はゆる金の死藏は認められなかつた。その第二段階に於いては遂に素朴的金數量説は解體せしめられるに至つたが、併しその金の世界的均衡理論に於いては、金死藏の問題はとりあげられなかつた。然るに現段階たる第三段階に於いては、此等三要素は金死藏の論據によるその新なる意味に於ける金理論に於いて再組織され、再認識され、再評價されるに至つたものであるといふことができる。

以上は金數量説の立場に従ふ限りに於て然り。金數量説自體への消極的意見は私は已に之を述べた。³¹⁾ 私は更に別の機會を待つて此の問題への私の積極的意見をも述べるであらう。

31) 拙稿：金數量説に就いて(經濟論叢第33卷 PP. 120-122);——：金問題批判(經濟論叢第33卷 PP. 154-155)